

由一の鮭図は語る（協同組合通信/金曜論弾） 14.12.13

中学生の頃に教科書で見た1枚の絵が、今無性に語りかけてくる。

高橋由一の名画「鮭図」である。幕末から明治初期に活躍した近代絵画の先駆者の動機、込めた思いを知りたい。ご存知の方がおられたら教えて欲しい。

昭和39年の頃の九州の片田舎の炭鉱町では、育ち盛りの中学生にも随分寒い冬で、立て付けの悪い家屋の隙間風が身にしみた。そんな折、珍しく東京の兄から届けられた塩鮭は、薄暗い台所に吊り下げられ、年の瀬から正月を迎える頃、家族の俵しくも素晴らしいご馳走であった。

骨をむき出し、塩が吹き切り取られて赤黒い姿をさらす魚肉は、磯の臭いもかすかに残り、圧倒的な存在感があった。

今や、我が国は世界中の海や山や森の食物にあふれている。

飽食日本、人々の暮らしは豊かで、感謝に満ちているだろうか？

歴史は繰り返し、東京オリンピックを契機に高度経済発展を遂げた日本を追うように、大躍進を続ける昇竜中国。数千年も、人々の生活・思想に嘗々と儒教が染込んだ国である。

「衣食足りて礼節を知る」と教えているが、現代の日本人は、「衣食足りて馬鹿になってしまった」。儒教国の30年後は予測もつかない。

日本の農業は、有限の資源・石油をだぶだぶ消費し、食物の旬（季節感）をなくした。

農薬汚染で本来の味のしない野菜や抗生物質漬けの餌で養殖された魚類がスーパーで、今も売られている。

グルメ番組を競うテレビは、タレントが大口をあけて食べ、味のない喋りを貴重な電波を使って、茶の間に垂れ流す。

一人一人が自分の食のあり方を考え見直さないと、ローマ帝国が奴隷の苦役の上でゆがんだ文明を謳歌した拳句、あっさり滅亡してしまった道を辿ってしまう。

鮭の一切れを慈しみ感謝する、自然に生かされている存在を自覚していた、日本人が、明治初期にはいたのだ。今こそ、親が子にしっかりと食と躰を伝えなければ、先祖伝来の我が国の誇るべき文化を、無分別の我々の世代でなくしてしまう。

先祖の物を大事にする骨太の生活を、日々の食で再考・再評価すべき時だ。

武士の心を持った由一の鮭図は、そのことを物語っている気がしてならない。

（ 気象情報システム株式会社 高津 敏 ）